慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・C・タッカー著『マルクスの革命理念』
Sub Title	Robert C. Tucker, The Marxian revolutionary idea
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.5 (1970. 5) ,p.136- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19700515-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Robert C. Tucker,
The Marxian Revolutionary Idea
New York, W.W. Norton & Company, INC,
1969, xi+240 pp.

R・C・タッカー著
『マルクスの革命理念』

著者が「まえがき」で述べているように、本書の第一章「マルクスの革命理念」、第二章「マルクスと分配上の正義」、第三章「古典的マルクス主義の政治理論」、第四章「マルクス主義と近代化」は、マルクスおよびエンゲルスのオリジナルな思想の基本的テーマを取り上げたもので、全体としては以前の著書『カール・マルクスにおける哲学と神話』——かつて筆者は『法学研究』第三十五巻第八号にその書評をしたことがある——の続篇にあたっている。つづく二つの章は、理念としてのマルクス主義が現実といかに対応し、変遷しているかという問題を取り扱う。すなわち、第五章「マルクス主義と共産主義革命」、第六章「マルクス主義運動の脱過激化」がそれである。ロバート・タッカー自身が意図するところは、つぎの言葉に明確に示される。「本書は、二つの基本的側面においてマルクス主義を論じている。第一は理論——人間、歴史、社会、政治に関する理論体系として。第二はイデオロギー——良い社会の幻想とその到達の方向を提示するラディカルな社会哲学として。それゆえにそれは、たんなる思想史研究ではない。マルクス主義的ラディカリズムは社会生活に強く衝撃をあたえており、マルクス主義と社会的現実世界との相互作用が本書の論題のひとつであるからだ。」

このようなアプローチは、マルクスの思想にのみ限られたことではなく、きわめて当然のことでもあり、したがってそこにユニークなものを期待することはできないが、タッカーのこの研究は、つねにリアリズムであろうと欲する鋭い、かつ柔軟な感覚に支えられている。そしてそれは、確かにある面でアメリカ的な問題把握だと言われようけれども、いわゆるマルクス主義的アプローチとは異つて、マルクスの古典的思想を現代的状況のなかでどう読み、未来を捉えるために用うるべきかを、われわれに示唆するところが少なくない。最初の三章は、マルクス主義の思想構造の核心に革命理念を据え、政治・経済に対する正しい分析視角——まさにマルクスの分析は政治経済学である——を明らかにする。これらについては、タッカーの前掲書をも併せて読まれるとよい。ここでは、第四章以下に限つて要点をたどつてみることにする。

最近の社会科学のいちじるしい傾向、あるいはその問題関心といつたものは《発展》概念である。古代→中世→近世という原型に代つて、伝統→移行→近代という図式、つまり近代化が人間と社会に

関する思考に優位を占めつつあることは否定し得ない。近代化理論は一般的に、マルクス主義と相容れない、しかもそれを退廃したものであるかにみなしがちである。近代化理論の観点からすれば、マルクスの理論は資本主義の形成、とりわけその初期的発展にとどまつている。だが、《近代化》というような言葉は、マルクス・エンゲルスの著作のどこにもあらわれていないのだが、彼らは《封建》社会から《ブルジョワ》社会へと形態転化しつつあつた近代社会の一般理論を定式化したわけで、タッカーの指摘するように、まさに《近代化》理論の先駆者として認められる。『ルイ・ボナパルトのブルュメール十八日』は伝統的な農民社会の分析にあてられたものと見ることもできようし、『共産党宣言』こそ近代化理論宣言だと言つてもよい。

『資本論』第二十四章「いわゆる本源的蓄積」は、農奴制の廃止、中世ギルドから都市労働者の解放、囲い込みによる農業人口の収奪、産業資本家の出現といつた歴史的諸傾向のうちに、近代化の革命的変動を確認したものであつた。マルクスの場合に、それはまた、ブルジョワジーを歴史的担い手とする資本主義的生産様式の抬頭と拡散であり、そこでは不断に激しい階級対立が闘われつつ、プロレタリア革命を不可避的にする過程であつた。したがつて、近代化とは革命化にほかならず、コミュニズムと深く結びついているので、マルクス主義は《近代化》理論を含んでいると同時に、それ以上のものである。それゆえに、マルクス主義に関するW・W・ロストオのつぎの見解にただちに同意できないわけである。すなわち、「その本質においてマルクス主義もまた、伝統的社会が近代工業技術の秘訣を習得することによつて、どのようにしてその構造の中に複利的関係を確立するにいたつたかということに関する理論であり、かつ究極の富裕段階に到達するまでの諸段階に関する理論である。」(『経済成長の諸段階―一つの非共産党宣言』木村健康ほか訳「ダイヤモンド社」一九五頁。) マルクスにとつては、近代化もしくは共産主義社会の実現は、経済成長によつて考えられているのではなく、それが豊かさの究極段階でもない。本質的には豊かな社会であろうけれども、高度大衆消費社会と同じではない。著者みずからの言葉によれば、共産主義革命の使命というものは「社会をさらに近代化することではなく、社会を人間化すること」である。ブルジョワ的近代化を否定することが問題ではなく、それを超克すること(*beyond modernization*)が問題であつたからだ。

マルクスの理論的貢献、あるいはその有効性を問えば、まず近代化をトータルな変革過程――経済構造はもとより、生活様式、文化的価値、意識形態、それに政治、社会、法律の諸制度を含めて――として把えたことである。しかもこの移行過程は、相反する社会的諸力の激烈な対立抗争をともなう。そして、近代化に作用する経済的・技術的要因が強調されたことである。この点、行き過ぎた経済決定論は修正される必要があるし、他方でまた、マルクスには《近代化の政治学》(politics of modernization) がまつたく欠落し、あるのはただ革命の政治のみだという非難も受けるであろう。近代化の多様性という問題――マルクスの思想のなかで乏しかつたのは、確

かに比較論的パースペクティヴであつたし、近代化をもつぱらブルジョワ化として理解し、その古典的モデルを十九世紀イギリス（少なくとも西ヨーロッパ諸国）に求めた歴史的経験による誤謬は、今日むしろ非ブルジョワ的近代化がさまざまなパターンを生みだしているとき、率直に認められねばならない。

さて、共産主義革命であるが、古典的マルクス主義はそれを世界史的現象として見透し、もつとも先進的な資本主義社会にその実現可能性を予測していた。ロシア革命の成功そのものが、その理論的パラドックスを露呈するわけなのだが、しかし、それは《特殊ロシア的運動》にとどまつたのではなく、二十世紀における革命の端初としてその後も揺曳してゆく。確かに、十月革命は共産主義革命の古典である。それに違いないけれども、他のいずれの国もこれを踏襲したものはなく、まつたく唯一のもので、レーニンの認識する《革命状況》さえ現実にはどこにも存在しなかつた。中国、北ベトナム、キューバ、アルバニア、ユーゴにおける武装闘争、モンゴル、北朝鮮、東ドイツ、ポーランド、ハンガリー、チェコ、ブルガリア、ルーマニアにおける強制された革命、これらの具体的事実に基づいて一般化するなら、共産主義革命は後進性の革命（*revolution of underdevelopment*）であり、まさに近代化への革命である。この革命が共産主義のリーダーシップのもとでどう展開されるか、国際共産主義の動向がますます多極化してゆくということ以外、一般的結論や法則は述べられない。《世界共産主義革命》が目下進行していると信ずる充分な理由は無いのである。

共産圏内部での分裂、もしくはイデオロギーの論争とか対立は、共産主義革命の将来の展望をかならずしも否定するものではない。しかし、そのような傾向がマルクス・レーニン主義に対するスターリン以後の変化を映しだし、さらには当のソヴェトにとつて、みずから仕上げた革命があたかも《裏切られた革命》であつたかの如き印象をあたえかねない。ともかく、一九五六年第二十回党大会のもつ意義、そして非スターリン化をめぐる諸解釈は、それらが今後また帝国主義下の戦争の不可避性というテーゼの修正、平和共存路線、社会主義への移行の非暴力的なプルラルな方途、ユーゴの承認、非共産主義諸国との協力関係、さらに民族主義運動への支持といわゆる第三世界の中立主義の擁護など、これらの教義上の修正は、一九六一年第二十二回党大会で正式にソ連共産党綱領に採用されたのである。このイデオロギーの混合をソヴェトの公式的見解では《創造的マルクス・レーニン主義》と呼んでいる。

この《創造的マルクス・レーニン主義》をフルシチョフ修正主義だと容赦なく非難するのは、いうまでもなく中国共産党である。《修正主義》とは、宗教における異端に類似し、いかにも情緒性を帯びた言葉であるゆえ、タッカーは記述的・分析的目的から、《ネオ・コミュニスト的マルクス主義》と呼ぶのがよいと言う。だが、中共の見解がまさに肯綮に当つているのだ。ソヴェト・コミュニズムはみずから造つた、制度化された体制を受容しており、その限りで、修正主義化していることは紛れもない。この現象を著者は脱過激化

(deradicalization) として概念化しようと試みている。ラディカリズムとその脱過激化のサイクルは、理論的問題としてさらに彫琢されねばならないが、その顕著な、典型的なドイツ・マルクス主義とソヴェト共産主義の運動のケース・スタディを通じて、明らかにされる。脱過激化をひき起す原因は、リーダーシップの変化と世俗的成功ということに帰せられるが、理論上の革命主義と実践上の修正主義、この間の深刻な矛盾が脱過激化のしるしなのである。ソヴェトの現実はこの段階にさしかかったわけだが、中共はどうか。毛沢東の文化大革命の目的を脱過激化傾向と闘うものだ、と論評するタッカーの見解は、それこそ専門家の意見にしたがいたいが、注意を払つて然るべきであろう。

終章「マルクスと歴史の終焉」は、著者のマルクスについての「個人的な信条」(personal credo) である。といつても、それは彼の学問的業績に裏づけられ、かつ崇高な理想に貫かれたものである。「わたくしの問いはつぎの通りである。今日のわれわれにとつて彼のもつとも重要な使信とは何であるか。わたくしが示唆したい答えは、現代に対して最大の持続的な意義と適切さをもつたマルクスの側面は、ユートピアの側面、今日のいわゆる《未来論》の部分だ、ということである。」『経済学・哲学手稿』における若きマルクス像に、タッカーは讃辞を呈しているのだが、歴史の終焉において、類的存在としての人間が自由な活動としての労働を回復し、創造的生産と自己実現をなし遂げる。そこにはかならずや新しい世界状態 (*Weltzustand*)、世界の真の人間化、積極的ヒューマニズムが現実化しよう。「美学的ユートピア」なるものが、人間の最高の芸術作品として完成を見ることであろう。この括弧つき《未来論》こそ失なわれてはならないマルクスのユートピア的信条であつたし、タッカーはそれが唯一のリアリズムになることを認めるが、あえてわれわれにラディカルな拒絶の精神を強要することなどしていない。いずれにせよ、こうした信条に生きることが、よりよきマルクス主義者であるだろう——ちようどよりよきキリスト教徒がそうであるように。

(奈良 和重)